私の研究テーマ

企業はなぜ似たように語るのか

北澤茉奈（杉野服飾大学助教）

研究発表テーマ

パブリック・ディスコースのデファクトスタンダード化

講師

誰でもどこでも公共的にことばを発信できる時代、「どう言うか」がこれまで以上に重要になっている。かつて公のメッセージは、政府や大手メディア、企業など発信力をもつ一部の組織に委ねられていたが、今では個人も企業も等しく発信者となりうる。その中でも企業は、社会的責任を担う存在として、慎重に言葉を選びながら発信している。私はこうした企業の言説、特に企業概要に注目し、その表現の変遷を分析してきた。企業の内実が大きく変わっていなくとも、語り口は確実に変化している。

明確なガイドラインがあるわけではないにもかかわらず、時代ごとにその言い回しには共通性が確認される。1998年には、"The Allstate Corporation is…the nation's largest…insurance company"（Allstate）や"discovers, develops, manufactures, and markets…products"（Merck）のように、自社の位置づけや行為を明確に語る傾向があった。2021年には、"[create] superior value"（Merck）のように行為が抽象化され、"our purpose is to enrich lives through technology"（Best Buy）のように行為主体が背景化される表現が目立つようになっている。こうした言語実践の変化や収斂は、その時代ごとの公共性や規範意識の表れであり、とりわけ現在では「誰にどう受け止められるか」への強い配慮として現れている。

誰もが発信できる時代、ことばの責任は話し手だけでなく聞き手にも及ぶ。多様性を尊重しながらも、私たちは知らず知らずのうちに、ことばにこれまで以上の「こうあるべき」を求めているのではないだろうか。本発表では、そうした制約がいかに形成されているのかを、企業の語りの変化を通して探っていきたい。（きたざわ・まな＝英語学）

複雑な現実を、手触りのあるものとして捉え直す

岩本遼（慶應義塾大学大学院生）

研究発表テーマ

知識に「触れる」
―Philip K. Dickの*The Man in the High Castle*における手工業製品と触ること

小さな装身具を手に、田上は呆然とする。いつもと変わらぬ景色にもかかわらず、見知ったはずの現実が消え去っている。第二次世界大戦での勝利者であるはずの日本人が、敗戦国であるアメリカ人に見下されているのだ。

The Man in the High Castle（1962）を代表するこの場面において、田上は神秘的な力を持つ装身具をつうじて現実改変を体験する。重要なのは、これが超現実的な装置や存在ではなく、人の手で作られ、触ることのできる「モノ」であるという点だ。

本作の作者フィリップ・K・ディックは、現実とは何かという問いを繰り返し描き続けた作家である。ディックの描く現実は常に不安定であり、虚構との境界線を絶えず行き来して読者にその本質を考えさせる。なかでも本作は、第二次世界大戦の結果が逆転し、日本とドイツによる占領下に置かれたアメリカを舞台に、連合国が勝利した世界を描く作中作の歴史改変小説や易経による現実把握という東洋的世界観を交えて、多層的な現実のあり方を描き出す代表作である。

本作の現実改変の契機となるのは、主人公の一人フランクが制作した手作りの装身具である。「無」を秘めていると評されるその装身具は、人が「触れる」ことで別の層の現実を開示する媒体となる。ディックを代表する概念である、大量生産品の成れの果て、つまりエントロピーの増大を象徴する「キップル」と対照的に、手工業的な「モノ」が真実への通路となりうるという直観が、そこには表れている。

本研究では、このような手工業製品の特性を、情動理論を下敷きに、ハイデガーのテクネー論とポイエーシスの概念を踏まえて再考する。モノに「触れる」ことが、単なる五感の働きを超えて、対象の存在を開き、知を媒介する経験となるならば、それはエントロピーに対抗する感覚的実践と見なせるのではないだろうか。このような「触れる」ことの持つ力を通じて、ディックの描く複雑な現実を、手触りのあるものとして捉え直すことが本研究の目標である。（いわもと・りょう＝米文学）

対等ではない複数の声

紺野直伸（東京大学大学院生）

研究発表テーマ

尋問のポリフォニー、J・M・クッツェーのバフチン受容とその実践

動物倫理について議論する人物たちを描いた、南アフリカの作家J・M・クッツェーによる物語仕立ての講演『動物のいのち』への応答文で、哲学者ピーター・シンガーはテクストのどの主張がクッツェーに属し、どの主張が登場人物コステロに属すのか分からない、と困惑している。

彼はそこに二人の声を聞き取っている。ミハイル・バフチンは作者と登場人物が対等に存在するような各々の声が独立して聞こえる小説を「対話主義」・「ポリフォニー」、全ての登場人物が作者の声に統合されている作品を「モノローグ」と呼び、そのうち前者を評価した。ではクッツェーの作品はそのどちらなのか。

初期論考でクッツェーは著者・語り手・登場人物を三つの「階級」と表現している。このことを敷衍すれば、クッツェーとコステロは対等ではない。しかし二人の声は完全には溶け合ってもいない。完全に溶け合っていればそれはクッツェーの声であり、その中にコステロの独立した人格を見留めることはないはずだ。この癒合と分離感の両立、シンガーが嘆いた読解上の困難こそクッツェーのテクストの構造的読解に寄与する違和感なのかもしれない。

対等ではない、不均衡な会話の極端な例として、「尋問」がある。尋問の場面は彼の作中でも度々現れるが、それは作者と語り手、語り手と登場人物の間でも行われているのではないか。彼はバフチンの概念を受容しつつ変形して用いている。本発表ではそれをバフチンの「対話」とは異なる、いわば「尋問」のポリフォニーとして論じる。

分析の対象となるのはクッツェーの論考・講演である。これまでの研究においてこれらのテクストは彼の真意が直截に現れているものとして、いわば論文の「答え合わせ」に用いられてきた。しかしそれはいささか素直すぎたのではないだろうか。彼は創作においても論考においても一貫したパフォーマンスを行なっている。我々はそこに尋問するクッツェーの声を聞き取るはずだ。（こんの・なおのぶ＝英文学）

空想と科学のはざまで

穴本玲奈（慶應義塾大学大学院生）

研究発表テーマ

F・ゴドウィンの『月の男』における「民族誌的」語りの位置付け

一五六二年に英国ノーサンプトンシャーのハニントンで生まれた聖職者・作家のフランシス・ゴドウィンは、複数の聖職を歴任するなかで、空想的な月旅行物語『月の男』を執筆した。本作では、スペイン人の主人公ドミンゴ・ゴンザレスが、西ヨーロッパから東インド諸島への波乱の旅を経て、渡り鳥と滑車を用いた手製の飛行装置で宇宙へ飛び立ち、宇宙の構造や月の社会文明を探究する過程を描く。その後地球に帰還し、一連の体験を中国で記録するという形で物語は締めくくられる。人間が自作の装置で月へ到達し、異世界の文化や風景を描き出すこの物語は、読者の想像力を強く刺激するものである。

ゴドウィンが本作を執筆したとされる一六二〇年代のイングランドでは、植民地主義の広がりの中で、東西インド諸国やアメリカ大陸への航海が活発化し、異国の自然環境や文化を紹介する旅行記や地誌が多く出版されていた。同時期には望遠鏡の改良により月面観測が進み、天文学者たちは月の地理的特徴に関心を向け始めていた。『月の男』における月旅行の発想は、月がもはや神話的な存在ではなく、現実に到達可能な場所として捉えられ始めていたことを象徴している。また、架空の地である月の描写には、地上の風土や民族を記述する際に用いられていた地方地誌のような（topographical）語りの形式が応用されている点も注目される。たとえば、月の言語が音律によって成り立つと描かれているのは、当時流通していたサミュエル・パーチャスの『パーチャスの巡礼』に見られる、中国語に関する記述の影響と考えられる。このように、『月の男』は空想、天文学、地誌などの異なる要素が交錯し、月の「民族誌」を形成しているのだ。

本発表では、『月の男』における地上および月世界の描写に注目し、架空の地である月の地理・民族・社会制度・言語・慣習について、地上の諸地域を描写する際に用いられている地方地誌的な記述方法が適用されていることを指摘することで、本作を現実世界と接続する空想旅行記として再評価する視点を提示したい。（あなも・れいな＝英文学）

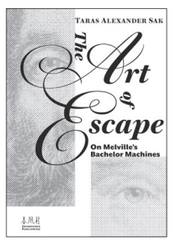
日本英文学会全国大会開催を機に

特集　英米文学／研究書のススメ

響きあうポーとディケンズ

四六判・250頁・3960円
松本靖彦、西山けい子編　作品や書評を手がかりに比較考察することで、両作家の特質と資質の違いを明らかにする、8つの刺激的論考。
春風社

The Art of Escape
On Melville's Bachelor Machines



A5判・220頁・6600円
Taras Alexander Sak 著　『白鯨』『ピエール』『信用詐欺師』などを検討し、「逃避の芸術」が現代においてもつ意義を考察。
春風社

エリザベス朝演劇と娯楽文化

四六判・272頁・4510円
篠崎実／中野春夫編著　16～17世紀の娯楽文化とエリザベス朝演劇の交錯を描く。大道芸や熊いじめなどの娯楽が演劇に与えた影響を活写する論集。
三修社

アメリカ映画史入門

A5判・462頁・4180円
杉野健太郎責任編集　各年代の監督と作品を映画史的意味とともに紹介。82人の監督、63作品については個別に取り上げ概説する。日本映画学会監修。
三修社

環境と文学の彼方に
エコクリティシズムと新しい創造の時代

A5判・412頁・3740円
辻 和彦・浜本隆三・青田麻未編
ASLE-Japan／文学・環境学会設立30周年記念出版。環境人文学の蓄積と現在地を提示する論考を収載。
彩流社

家具からインテリアへ
ヴィクトリア朝小説にみるイギリス室内装飾文化史

A5判・320頁・4400円
三宅敦子著　「趣味（テイスト）」をキーワードに、ディケンズ、ギッシング、ジェイムズのヴィクトリア朝小説を対象に辿るイギリス室内装飾文化史。
彩流社

ウィリアム・フォークナーの日本訪問
冷戦と文学のポリティクス

四六判・240頁・3300円
相田洋明編著　1955年に日本を訪問したフォークナー。冷戦期の政治と文化が交錯する焦点となったフォークナー訪日の意味と影響を改めて検討する。
松籟社

フォークナーの晩年様式（レイト・スタイル）
その展開と変容

四六判・240頁・3300円
山本裕子著　フォークナーの後期作品に見られる、老いのペルソナと自伝的様式を精密に考察。フォークナーの〈レイト・スタイル〉の内実に迫る。
松籟社

別の地図
英文学的小旅行のために

四六判・307頁・2420円
高橋和久著　『一九八四年』論、絵解きが紡ぐ18世紀英文学史、フォースター再評価、ウルフの描出話法、20世紀末読書案内…スリリングな批評の世界。
松柏社

バベルをこえて
多言語習得の達人をめぐる旅

A5判・484頁・4180円
マイケル・エラード著／竹内理訳　歴史の流れに翻弄され続ける「言葉を学ぶ」という営みを、超多言語習得者という存在の解明を通して捉える。
松柏社

ゴシックと身体
想像力と解放の英文学

四六判・240頁・2640円
小川公代著　家父長制に抗う女たちがもちいたものこそ“ゴシック”の戦術だったのではないか。著者の長きにわたるゴシック文学研究、初の単行本化。
松柏社

評伝ジョウゼフ・コンラッド
女性・アメリカ・フランス

四六判・298頁・3300円
ロバート・ハンプソン著／山本薫訳
支配的な価値基準のもとで繰り返されてきた「船乗り」「海洋小説の作家」という根強いコンラッド像を覆す。
松柏社

病と障害のアメリカンルネサンス
疫病、ディサビリティ、レジリエンス

A5判・336頁・4180円
髙尾直知・伊藤詔子・辻祥子・野崎直之編著　19世紀アメリカ作家たちがいかにして身体や精神の障害をめぐる想像力を鍛えあげ、創作に活かしたのか？
小鳥遊書房

シェイクスピアと宝塚

四六判・192頁・2200円
竹村はるみ著　内気なロミオが世界の王に!?――宝塚の文化・文脈で翻案されるシェイクスピアの魅力を存分に掘り下げる。
大修館書店

比喩と反語
アメリカの詩と批評

四六判・432頁・5720円
富山英俊著　詩とその後の展開の諸相を引用と論考により提示し、批評の実践とくに「比喩」の種々の言語ゲームを考察。
せりか書房

ソール・ベロー研究
ベローの文学とアメリカ社会

四六判・292頁・2750円
坂口佳世子著　長編第一作『宙ぶらりんの男』から第九作『学部長の十二月』までの作品をその当時アメリカ社会を概観しながら論じている。
成美堂

アメリカ文学と戦争
American Literature and Warfare

A5判・276頁・3630円
依藤道夫編註／小倉いずみ・古屋功・依藤朝子・滝口美佳・花田愛著　文人たちが戦争というテーマといかに取り組み描き出してきたかを考察する。
成美堂

ジョン・アップダイクの世界
体験から虚構へ

四六判・204頁・2200円
岩元巌著　ジョン・アップダイクは未成年期の体験を自らの作品の「鉱脈」と公言する。「鉱脈」がいかに虚構を生み出したのか。謎に迫る著者の労作。
成美堂

芥川龍之介における海外文学受容
旧蔵書越しに見える風景

A5判・500頁・7920円
澤西祐典著　芥川が残した蔵書中の洋書の数は844冊。芥川はどんな洋書を読み、いかに影響を受けたのか。全点全ページ調査した研究成果。
ひつじ書房

アメリカ文学と大統領
文学史と文化史

A5判・544頁・6380円
巽孝之監修・大串尚代／佐藤光重／常山菜穂子編著　歴代大統領をたどり、みえてくる新たなアメリカ文学史のかたち。
南雲堂

太陽に挑む鷲
シェリー後期散文集

四六判・272頁・5060円
上野和廣／白石治恵監訳・杉野徹／鈴木里奈／新名ますみ訳　フランス革命後、権威に反逆し、不合理に憤った英国詩人シェリーの魂の叫びがここに！
南雲堂

西洋文学にみる魔術の系譜

A5判・244頁・2860円
田中千惠子編著　古代から現代まで、魔術の隠された〈知の歴史〉を炙り出す。高山宏の最新論考「「近代」は魔に始まり魔に終る」なども収録！
小鳥遊書房

アンドロセントリック・アメリカ
コニーとクローヴァーと二人のヘンリー

四六判・194頁・2420円
大井浩二著　二人の女性芸術家に対するヘンリー・ジェイムズとヘンリー・アダムズの発言や態度を通して男性中心主義＝アンドロセントリズムを再考。
小鳥遊書房

スイシンファー短編集
スプリング・フレグランス夫人

四六判・322頁・2970円
スイシンファー／里内克巳・松本ユキ訳　表題作はじめ、100年前の「アジア系アメリカ文学」黎明期の精華22作を本邦初訳でお届けします！
小鳥遊書房